

日本の中学生の親子関係¹⁾²⁾

松 井 洋*

Parent-child Relationships-Japanese Junior High School Students

Hiroshi MATSUI

要 約

これまでの研究成果から、現在の我が国の青少年の問題の原因として、親子関係の問題が重要なのではないかと考えた。これを検証するために、まず、中学生とその親が、自分たちの親子関係や親の行動をどのように考えているのか、中学生—親の間にこの認識のギャップはないかということを検討した。被験者は東京都内の公立中学校の1, 2, 3年生の生徒とその父親、母親。被験者数は、生徒男子160名、女子154名、合計314名、父親（または父に代わる人）194名、母親（または母に代わる人）199名、393名である。結果は、中学生の親子関係の認識は親子間でかなり異なり、親は自分たちの行動や関係をかなり評価しているが、親が思っているほど子どもは親子関係や親の行動を評価していない。このように、親と子の間に自分たちの親子関係についての認識に大きなズレがあるということがわかった。

キーワード：親子関係、心理的距離、中学生

目 的

筆者らは、日本の中学生・高校生の価値観、愛他性、道德意識、友人関係、親子関係等について、国際比較調査、経年比較調査を行ってきた。その結果、日本の若者は、物質指向、現在指向などかなり偏った価値観があり、性に関することなど非行に対して許容的で、愛他性が低く、対人関係が弱い等、他の国の若者と比べたとき、かなり顕著な傾向がある事がわかった。また、そのような傾向は経年比較の結果、この10年ほどの間に顕在化したと言い得る結果を得た（松井1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 松井他1995, 1998, 中里・松井1992, 1993,

*教授 社会心理学

1996, 1999 他)。このようなこのような傾向は、わが国の文化的特徴の一つの現れ、あるいはわが国の社会の時代的変遷の現れと言えるだろう。とはいえ、このような傾向は他の国から見て『異質』であり、青年自身にとっても、ひいてはわが国にとっても『弱点』と言わざるをえない。それ故、このような日本の若者の問題傾向の原因を、わが国の文化や時代の変遷と一般的に理解しただけで止めるわけにはいかない。このような問題傾向と直接結びつく原因を特定して、対処の方法を見出す必要があると考える。

日本の中学・高校生の上記のような問題傾向の原因として考えられることの第一には親子関係の問題があげられる。その理由は、前述の研究の結果、日本の中学・高校生の親子関係は他の国に比べて、子どもが親のようになりたくない、親を尊敬しない等、心理的距離が遠いと言えるような問題があり、また、心理的距離が遠いことは愛他性の低さと関連があるという結果もあるからである（松井他 1999, 2000, 中里・松井 1997, 1999）。

以上の理由により、日本の若者の親子関係について検討する必要があると考える。ところで、日本の親子自身は自分たちの親子関係についてどのように考えているのであろうか。先に指摘したような問題を感じているのだろうか、あるいは健全だと思っているのだろうか。日本の親子関係について考えるにあたり、まず、親子自身の親子関係に対する認識について押さえておきたいと思う。

本研究の目的は、日本の親子関係の問題点を検討することである。このために、中学生とその親が自分たちの親子関係、そして、親の行動をどのように見ているのか、そして、両者の間の認識のずれはどこにあるのか、このようなことは男子と女子、それぞれの親、父親と母親の間で違いはあるのかということを検討する。

方 法

1. 被験者：東京都内の公立中学校の1, 2, 3年生の生徒とその父親、母親。被験者数は、生徒男子160名、女子154名、合計314名、父親（または父に代わる人）194名、母親（または母に代わる人）199名、393名。

2. 調査内容：父子関係、母子関係それぞれについて、10問、合計20問の質問紙調査を行った。具体的には、「父は、何かと私に相談する」、「父と、うまくいっている」、「父を、尊敬している」、「父は、私に期待している」、「父の様に、になりたい」、「父は、私のすることに何かと口出しする」、「父は、私にあまりかまわない」、「父は私のいうことなら何でもきいてくれる」、「父から、人に親切にすることの大切さを教わった」、「父は、自分にとってコワイ存在だ」。な

お、父はの後に（または父に代わる人）という言葉を入れた。また、母に関する質問では、父を母に置き換えた。保護者への質問では、父、母を「あなたは」に置き換えた。選択肢は、「そうである」、「比較的そうである」、「あまりそうでない」、「そうでない」の4件法である。なお、本調査ではこれらの他に、価値観、道徳意識、非行許容性等について21問の質問をしているが、その結果についてはここでは述べない。

調査方法：調査は中学校のPTAの協力を得て、1999年10月～11月に無記名で行った。中学生は学校で、保護者は自宅で回答した。

結 果

結果は、男女生徒、父親、母親の各々の属性別に、「そうである」を1、「そうでない」を4として平均値を求め、比較する群間のt検定を行った。

1. 保護者の認識

親の行動や親子関係について、保護者はどのように認識しているのだろうか。表1に父母別に各項目別の値を示した。表1の値は4段階評価の父親・母親の平均と、父母間の平均値の差であり、値が小さい方がその傾向が強いという評定であったことを示す。

父母の間に差はあるが、どちらも「うまくいっている」、「父を（母を）、尊敬している」、「父は（母は）、期待している」、「人に親切にすることの大切さを教えた」に関しては比較的「そうである」という肯定的な傾向が強く、反対に、「父の様に（母の様に）、なりたい」、「あまりかまわない」、「いうことなら何でも聞く」については否定的である。

父親が母親に比べて有意に「そうである」という肯定的な傾向が強い項目は、「尊敬している」、「あまりかまわない」、「コワイ存在だ」である。「父の様になりたい」にもその傾向がある。

反対に、母親が父親に比べて有意に「そうである」という肯定的な傾向が強い項目は、「何

表1 父親と母親の行動態度に対する**保護者自身**の評価と父-母の比較 (**p < .01, *p < .05, †p < .1)

	何かと相 談する	うまくい っている	尊敬して いる	期待して いる	父(母) の様に	何かと口 出しする	あまりか まわない	言う事を 聞く	人に親切 を教える	コワイ 存在
父親	2.62	1.84	2.08	2.09	2.79	2.73	2.68	3.06	1.81	2.22
母親	2.04	1.66	2.38	1.99	2.94	2.21	3.02	2.98	1.59	2.61
父-母	.57**	.18*	-.29**	.09 ns	-.15†	-.51**	-.33**	.07 ns	.22**	-.38**

表2 父親・母親の行動態度に対する男子・女子中学生のそれぞれの保護者の評価
 (上段父親、下段母親についての平均値と男子と女子の保護者の差、**p<.01, *p<.05, †p<.1)

		何かと相 談する	うまくい っている	尊敬して いる	期待して いる	父(母) の様に	何かと口 出しする	あまりか まわない	言う事を 聞く	人に親切 を教える	コワイ 存在
父	男保	2.57	1.76	1.96	2.04	2.64	2.71	2.63	3.20	1.83	2.08
親	女保	2.66	1.91	2.20	2.14	2.94	2.74	2.73	2.92	1.80	2.35
	男-女	-.08 ns	-.15 ns	-.23 [†]	-.09 ns	-.30*	-.03 ns	-.10 ns	.28*	.03 ns	.27 [†]
母	男保	2.09	1.58	2.35	2.00	3.02	2.23	3.04	3.02	1.59	2.61
親	女保	2.00	1.73	2.40	1.99	2.88	2.20	3.00	2.95	1.59	2.60
	男-女	.09 ns	.15 [†]	.05 ns	-.00 ns	.13 ns	-.03 ns	-.03 ns	.07 ns	-.00 ns	.01 ns

かと相談する」, 「うまくいっている」, 「何かと口出しする」, 「人に親切にすることの大切さを教えた」である。

父親は自分の親としての立場や存在の在り方についての抽象的な評価であるのに対して、母親は親子間の具体的な行為について自分を評価していると言えよう。

2. 男子中学生の保護者と女子中学生の保護者の違い

保護者自身の認識は、子どもが男子の場合と女子の場合とでは異なるのだろうか。表2のように、違いは父親に対して多くあり、違いがある項目は「父の様になりたい」で男子の父親に強く、また、「何でも言うことを聞く」は女子の父親に強い。「コワイ存在」, 「尊敬している」も差のある傾向が見られ、どちらも男子の父親に強い。母親に対しては男子の母親の方が「うまくいっている」という差のある傾向があるが、子どもの男女についての有意な差のある項目はない。

3. 中学生の認識

親の行動や親子関係について、中学生はどのように認識しているのだろうか。表3に父母別に生徒の評価を各項目別に平均値を示した。父母の間に有意な差のある項目は「何かと相談する」, 「うまくいっている」, 「何かと口出しする」, 「あまりかまわない」, 「いうことなら何でも聞く」, 「人に親切にすることの大切さを教えた」である。このうち、「あまりかまわない」, 「いうことなら何でも聞く」に関しては父親に対しての方が「そうである」という肯定的な傾向が強く、反対に、「何かと相談する」, 「うまくいっている」, 「何かと口出しする」, 「人に親切にすることの大切さを教えた」については母親に対しての方が強い。

日本の中学生の親子関係

表3 父親と母親の行動態度に対する中学生の評価 (**p < .01, *p < .05, †p < .1)

	何かと相談する	うまくいっている	尊敬している	期待している	父(母)の様に	何かと口出しする	あまりかまわない	言う事を聞く	人に親切を教える	コワイ存在
父親	3.26	1.98	2.42	2.58	2.84	2.69	2.89	2.90	2.37	2.92
母親	2.63	1.83	2.42	2.50	2.76	2.09	3.18	3.01	2.16	2.94
父-母	.62**	.14*	.00 ns	.07 ns	.08 ns	.59**	-.29**	-.10*	.21**	-.02 ns

表4 父親・母親の行動態度に対する男子と女子中学生の評価
(上段父親、下段母親についての平均値と男子と女子の差、**p < .01, *p < .05, †p < .1)

	何かと相談する	うまくいっている	尊敬している	期待している	父(母)の様に	何かと口出しする	あまりかまわない	言う事を聞く	人に親切を教える	コワイ存在
父 男子	3.23	1.96	2.32	2.55	2.73	2.57	2.88	3.05	2.38	2.92
親 女子	3.28	2.00	2.53	2.61	2.96	2.81	2.90	2.76	2.36	2.92
男-女	-.04 ns	-.03 ns	-.20†	-.06 ns	-.22*	-.24*	-.02 ns	.28**	.01 ns	.00 ns
母 男子	2.74	1.91	2.43	2.46	2.79	2.06	3.07	3.05	2.19	3.00
親 女子	2.49	1.74	2.38	2.51	2.70	2.12	3.28	3.01	2.15	2.86
男-女	.24*	.17†	.05 ns	-.05 ns	.08 ns	-.06 ns	-.20*	.04 ns	.04 ns	.13 ns

このように中学生から見たときは、父親は放任的で、母親はより干渉的で、子どもに対しての関与が大きいと評価されている。

4. 男子中学生と女子中学生の親に対する認識の違い

親子関係に対する中学生の認識は、中学生が男子の場合と女子の場合とでは異なるのだろうか。表4の様に、男女の違いは父親に対して多くあり、違いがある項目は[何かと口出しする]、「父のようになりたい」で男子に「そうだ」という肯定的傾向が強く、「尊敬している」も差のある傾向が見られる。また、反対に「言うことを何でも聞く」は女子に強い。母親に対しては、「あまりかまわない」で男子に「そうだ」という肯定的傾向が強く、また、反対に「何かと相談する」は女子に強く「うまくいっている」についても同様の傾向が見られる。

5. 中学生と保護者の認識の違い

次に、中学生徒とその保護者の父親・母親が親子関係や親の行動・態度についてそれぞれどのように感じているか比較した。表5の値は4段階評価の生徒と、その父親・母親の平均と、親子間の平均値の差である。表5のように、中学生とその父母の間には、親子関係や親の

表5 父親・母親の行動態度に対する**中学生と保護者自身**の評価
(上段父親、下段母親についての平均値と生徒と保護者の差、**p<.01, *p<.05, †p<.1)

	何かと相談する	うまくいっている	尊敬している	期待している	父(母)の様に	何かと口出しする	あまりかまわない	言う事を聞く	人に親切を教える	コワイ存在
父 生徒	3.26	1.98	2.42	2.58	2.84	2.69	2.89	2.90	2.37	2.92
親 父親	2.62	1.84	2.08	2.09	2.79	2.73	2.68	3.06	1.81	2.22
生-父	.63**	.13†	.33**	.49**	.04 ns	-.04 ns	.20*	-.15*	.55*	.70**
母 生徒	2.61	1.83	2.41	2.48	2.75	2.09	3.17	3.03	2.17	2.93
親 母親	2.04	1.66	2.38	1.99	2.94	2.21	3.02	2.98	1.59	2.61
生-母	.57**	.16**	.02 ns	.49**	-.19*	-.12†	.15*	-.05 ns	.57**	.32**

表6 父親・母親の行動態度に対する**男子中学生と保護者自身**の評価
(上段父親、下段母親についての平均値と生徒と保護者の差、**p<.01, *p<.05, †p<.1)

	何かと相談する	うまくいっている	尊敬している	期待している	父(母)の様に	何かと口出しする	あまりかまわない	言う事を聞く	人に親切を教える	コワイ存在
父 生徒	3.23	1.96	2.32	2.55	2.73	2.57	2.88	3.05	2.38	2.92
親 父親	2.57	1.76	1.96	2.04	2.64	2.71	2.63	3.20	1.83	2.08
生-父	.65**	.20*	.35**	.50**	.08 ns	-.14 ns	.25*	-.15 ns	.54**	.84**
母 生徒	2.74	1.91	2.43	2.46	2.79	2.06	3.07	3.05	2.19	3.00
親 母親	2.09	1.58	2.35	2.00	3.02	2.23	3.04	3.02	1.59	2.61
生-母	.64**	.33**	.08 ns	.46**	-.22*	-.17†	.03 ns	.03 ns	.59**	.38**

行動に対しての認識に多くの違いがある。その違いは、父の「言うことを聞く」と、母の「母の様になりたい」を除いては父母の方の値が小さい。つまり、親が評価しているほどは、子どもは親子関係を評価していない。

父子の間に有意な差のある項目は、差の大きい順に、「コワイ存在」、「何かと相談する」、「人に親切を教える」、「期待している」、「尊敬している」、「あまりかまわない」である。「うまくいっている」にも差のある傾向があり父親のほうが「そうだ」と肯定的に答えている。「言うことを聞く」のみは父の方がそうでないと答えている。差のない項目は「父の様に」と「何かと口出しする」で、どちらも否定的である。つまり、父親は自分を尊敬されるりっぱな存在と考えているが、子どもはあまりそうは思っておらず、放任的であると感じている。

母子の間に有意な差のある項目は、差の大きい順に、「何かと相談する」、「人に親切を教える」、「期待している」、「コワイ存在」、「うまくいっている」、「あまりかまわない」であり、母親の方が中学生より「そうだ」と肯定的に思っている。そして反対に母の方が「そうだ」と思っていないのが「母の様になりたい」である。また、母子一致して「言うことを聞く」とは思っ

表7 父親・母親の行動態度に対する女子中学生と保護者自身の評価
(上段父親、下段母親についての平均値と生徒と保護者の差、**p<.01, *p<.05, †p<.1)

	何かと相談する	うまくいっている	尊敬している	期待している	父(母)の様に	何かと口出しする	あまりかまわない	言う事を聞く	人に親切を教える	コワイ存在
父 生徒	3.28	2.00	2.53	2.61	2.96	2.81	2.90	2.76	2.36	2.92
親 父親	2.66	1.91	2.20	2.14	2.94	2.74	2.73	2.92	1.80	2.35
生-父	.61**	.08 ns	.33**	.47**	.01 ns	-.06 ns	.16 ns	-.15 ns	.56**	.57**
母 生徒	2.49	1.74	2.38	2.51	2.70	2.12	3.28	3.01	2.15	2.86
親 母親	2.00	1.73	2.40	1.99	2.88	2.20	3.00	2.95	1.59	2.60
生-母	.49**	.00 ns	-.02 ns	.52**	-.17 ns	-.07 ns	.27**	.06 ns	.55**	.26*

いない。

6. 男子中学生とその保護者

前項の中学生とその保護者の比較の結果について中学生の男子と女子とでは違いがあるだろうか。まず、男子中学生とその保護者について見てみた。表6のように、男子中学生とその父母との間には、男女込みで比べた時より生徒—保護者間の差が大きい。男子中学生とその保護者の場合、父母共に有意差のある項目は、「何かと相談する」、「うまくいっている」、「期待している」、「人に親切を教える」、「コワイ存在」である。父親に関してのみ有意差のある項目は、「あまりかまわない」で、これらの全てで男子中学生より父母の方が「そうである」という傾向がある。他方、母親に関してのみ有意差のある項目は「母の様になりたい」であり、「何かと口出しする」もその傾向がある。これらのみは男子中学生の方が母親より「そうである」という肯定的に答える傾向がある。

以上の様に、男子中学生については父母共に中学生—親の間の認識のズレが大きいですが、特に母親より父親の方がそのような問題が強く見られる。

7. 女子中学生とその保護者

中学生とその保護者の比較の結果について、女子中学生とその保護者について見てみた。表7のように、女子中学生とその保護者の場合、父母共に有意差のあり、親の方が「そうだ」という項目は、「何かと相談する」、「期待している」、「人に親切を教える」、「コワイ存在」である。父親に関してのみ「そうだ」という有意差のある項目は「尊敬している」で、母親に関してのみ「そうだ」という有意差のある項目は「あまりかまわない」である。以上の様に、女子

中学生については男子ほど中学生と親の間の認識のズレは大きくない。

考 察

保護者の認識

親子関係や親の行動についての親の認識は、父母の間に差はあるが、どちらも「うまくいっている」、「父を（母を）、尊敬している」、「父は（母は）、期待している」、「人に親切にすることの大切さを教えた」に関しては比較的「そうである」という傾向が強く、反対に、「父の様に（母の様に）、なりたい」、「あまりかまわない」、「いうことなら何でも聞く」については否定的である。つまり、親は親の行動についても、親子関係についても子どもに比べて肯定的に見ている。

父親と母親では親の行動や親子関係に対する見方が異なり、父親は「尊敬している」、「あまりかまわない」、「コワイ存在だ」、「父の様になりたい」というように、子どもとの距離感は遠いがしかし尊重されているという、言わば『伝統的な日本の父親像』という感じ方をしている。他方、母親は、「何かと相談する」、「うまくいっている」、「何かと口出しする」、「人に親切にすることの大切さを教えた」など具体的な行動や親子関係について自己評価しており、父親に比べて『心理的距離が近い』と言える。

男子中学生の父親は「（息子は）父の様になりたい」、「コワイ存在」、「尊敬している」と考える傾向があり、女子の父親は「何でも言うことを聞く」という傾向がある。つまり、前述の『伝統的な日本の父親像』という父親自身の感じ方は息子に対する父親像ということであり、娘に対しては『甘い』父親だと自覚している。

中学生の認識

親の行動や親子関係について、中学生の認識は、「あまりかまわない」、「いうことなら何でも聞く」に関しては父親に対しての方が「そうである」という傾向が強く、反対に、「何かと相談する」、「うまくいっている」、「何かと口出しする」、「人に親切にすることの大切さを教えた」については母親に対しての方が強い。つまり、父親に対しては中学生は、放任で甘い親と見ており、父親自身の距離感は遠いがしかし尊重されているという、伝統的な日本の父親像だという認識とはずれがある。他方、母親に対しては、具体的な行動や親子関係について自己評価しており、これは母親の自己評価と一致する。

親子関係に対する中学生の認識の男女の違いは父親に対して多くあり、男子は女子より「何

かと口出しする]、「父の様になりたい」、「尊敬している」という傾向が見られる。また、反対に「言うことを何でも聞く」は女子に強い。つまり、父親は息子とは比較的良い関係であるが、娘に対して『甘い』という傾向である。

母親に対しては、「あまりかまわない」で男子に「そうだ」という傾向が強く、また、反対に「何かと相談する」は女子に強く「うまくいっている」についても同様の傾向が見られる。

中学生と保護者の認識の違い

中学生徒とその保護者の父親・母親が親子関係や親の行動・態度についての認識を比較すると、中学生とその父母との間には、親子関係や親の行動に対しての認識に多くの違いがある。その違いは、父の「言うことを聞く」と、母の「母の様になりたい」を除いては父、母の方の値が小さい。つまり、親が評価しているほどは、子どもは親子関係を評価していない。このような傾向は、男子中学生について父母共に中学生と親の間の認識のズレが大きく、特に母親より父親の方がそのような問題が強く見られる。

結 論

以上のように、中学生の親子関係の認識は親子でかなり異なり、親が思っているほど子どもは親子関係や親の行動を評価していない。そして、このような親と子の親子関係の認識にズレがあるということは、日本の親子関係には心理的距離が遠いと言い得る問題があり、しかし、親はそのことを楽観的に見ていて、気がついていないと考えられるだろう。特に、父親は子どもとの距離感は遠いがしかし尊重されているという、言わば『伝統的な日本の父親像』という感じ方をしているが、子どもはそう考えていないというギャップが大きい。

本研究は、そもそも現代の日本の青少年の問題傾向の原因を親子関係の問題にあるのではないかという考えから行なわれた。以上のような親の認識不足があると考えられる結果はこの仮定をますます強めるものである。それ故、我が国の青少年問題を改善するためには、親子関係の改善が必要であり、そのためには、まず親が親子関係の現状に目覚める必要があると考える。

引用文献

- 松井 洋 1991, 「青年期における愛他行動の発達とその規定因」, 『川村学園女子大学研究 紀要』 第2巻 181-193.
松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之 1995 「愛他性の構造に関する国際 比較研究」

- 『日本心理学会第59回大会発表論文集』, 173.
- 松井 洋 1997, 「愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—」『川村学園女子大学研究紀要』 第8巻 第1号, 147-165.
- 松井 洋 1998, 「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』 第8巻 第1号, 147-165.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 1998, 「愛他性の構造に関する国際比較研究」, 『社会心理学研究』, 第13巻, 2号, 133-142.
- 松井 洋 1998, 「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—」, *Health Sciences*, vol.14, no. 2, 45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋 1998, 「愛他性に関する国際比較研究—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』 第9巻 第1号, 175-186.
- 松井 洋 1999, 「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究—」, 『川村学園女子大学研究紀要』 第10巻.
- 松井 洋, 2000, 「日本の若者のどこがへんなのか?—中学生・高校生の国際比較から—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第11巻, 第1号, 101-114.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 2000, 「中学生の親子の心理的距離」, 『日本心理学会第64回大会論文集』, 190.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol. 27, pp. 562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes —A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths—. *International Journal of Psychology*, vol. 28, pp. 48.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久 1992, 「非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」, (財)日工組調査研究財団委託研究報告書.
- 中里至正・松井 洋 (編著), 1997 『異質な日本の若者たち』, プレーン出版.
- 中里至正・松井 洋 1999 『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社.

- 1) 本論文は, 東洋大学中里至正教授との共同研究の成果をまとめたものである。
- 2) 本研究の一部は, 日本心理学会第64回大会で発表された。